

観峰館 (滋賀県東近江市)

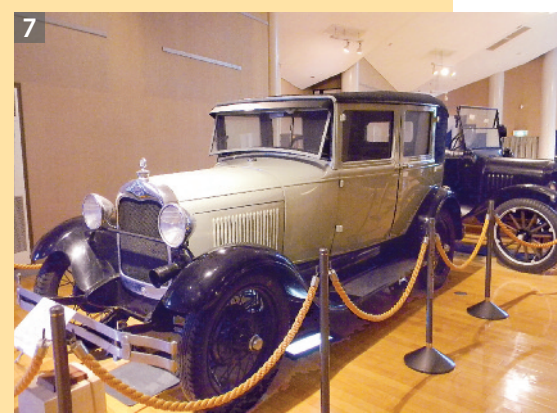
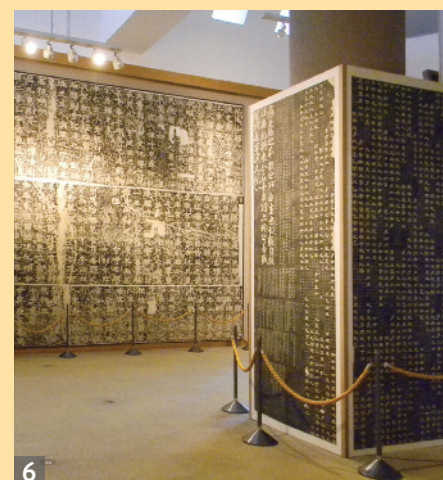
1995年10月に「書の文化にふれる博物館」として開館。重厚な「澹泊敬誠殿」の復元や、大きすぎて二分割せざるを得なかった「紀泰山銘」の拓本、紀元前からの書体の変遷を見られる資料など、書の起源である中国の壮大なスケールをほうふつとさせる展示が魅力だ。

館の所蔵品は書画だけで1万7000点。創立者・原田観峰氏が集めた1880〜1940年頃の近・現代の中国書画がメインで、この時代のもは日本では珍しいという。4、5階の展示室では、時代や作家、とき

には教科書や和本に書かれたらくがきなど、様々なテーマで企画展を行う。露出展示が多いのは、「すばらしい作品を直接見てほしい」という原田氏の願い、こだわりがあるからだろう。間近でじっくり鑑賞できるのがうれしい。さらに館内はほぼ撮影可能というから、SNSを楽しんでいる人も活用できそう。

9月から開館25周年を記念し、秋季企画展が新館で行われている。テーマの「耄耋」とは、本来は長寿を表す言葉で、「耄」は猫、「耋」は蝶と発音が同じことから、猫と蝶が描か

れた長寿を願うおめでたい画題を指す。掛け軸を中心に、約50点の近代中国絵画を展示する。戦争や革命など、近代中国は動乱の時代。不安を抱え込んでいた当時の人々の間では、吉祥画が流行したそう。その時代と重なるものがある今だからこそ、かわいかったりユーモラスだったり、近現代画家が描いた「ヘタウマ」な猫たちの姿を見て癒やされてほしいですね」と学芸員の寺前公基さん。期間は11月23日まで。キャラ立ちした愛らしい猫たちの福にあやかう。



陳務人『耄耋耆年図』
清時代末期～民国時代
(写真提供／観峰館)

15階展示室。中国書画のコレクションを企画展で公開
2世界遺産・避暑山荘の澹泊敬誠殿を復元展示。中央には玉座が置かれ、至る所に吉祥図柄が彫刻されている
3美しい田園風景の中に立つ
41階展示室入り口では獅子がお出迎え。正面にあるのは清の第4代皇帝・康熙帝による扁額「避暑山荘」
53階常設展示室では書体の変遷の歴史を拓本などで紹介。契刀という古代中国の貨幣には「一刀平五千」という文字が入っている
61階展示室には大きな拓本が。「紀泰山銘」(奥)は高さ13.3m、幅5.3mを二分して展示している。「石台孝経」(右)は紀泰山銘に比べ華やかな印象の文字。お手本にと写していく人も多い
7印象がガラリと変わる西洋アンティーク室。オルゴールやクラシックカーなどを展示
8清の第6代皇帝・乾隆帝の書斎「三希堂」を復元(写真提供／観峰館)
9新館特別展示室では秋季企画展を開催

開館25周年秋季企画展

「耄耋ってニャンだ!? ―吉祥の願い―」展 9/19～11/23
※9/27、11/14・15 は無料入館日
※21ページに観峰館の広告があります。

● 10時～17時(最終入館16時) ● 月曜休館(祝日の場合は翌日)
● 一般500円 学生300円 中学生以下無料 ● 滋賀県東近江市五箇
荘竜田町136 ☎ 0748-48-4141 <http://kampokan.com/>